
東方英雄王

ランダムJAPAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方英雄王

【Nコード】

N4102S

【作者名】

ランダムJAPAN

【あらすじ】

傲岸不遜で唯我独尊、おまけに傍若無人。自らを「唯一無二の王」と称してはばからない。英雄王であると同時に、性格と高すぎる能力が常時の慢心と油断を生み、ついには自身が贗作者と蔑んでいた少年にやられてしまう。その上、出来損ないの聖杯の依代に吞まれ、彼は消滅する筈だった。しかし、流星は英雄王。彼は消滅しなかったのだ。彼がたどり着いた先は……。

プロローグ

「この我が^{オレ}が……ッ！」

剣同士がぶつかり合う。

乾いた鈍い音が、赤い空間にて響き渡った。

数々の剣がまるで墓標のように刺さっている、物々しい場所で男二人が死合という名のワルツを踊る。

「このような贗作にイイツッ！」

金髪の、赤い目をした青年は目の前で自分に刃向かい剣を振るう、赤茶髪の少年を憎々しげに睨みつける。

「オノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレツ！」

呪詛のように繰り返す言葉。剣戟は激しさを増す。

刃が幾度となくぶつかり合い、火花を散らした。

力量は、互角。

金髪の男が優勢かと思えば、赤茶の少年が押し返す。

赤茶の少年が押ししているかと思えば、金髪の男がそれを払いのける。

目まぐるしく入れ替わる攻守。

しかし、それにも終わりがくる。彼らの激しい攻防に耐えきれな

なくなった、金髪の男の剣が折れたのだ。

「なっ！」

金髪の男、ギルガメツシユは目を見開くと、すぐに自身の能力である『王の財宝』ゲート・オブ・バビロンを展開し、円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状の剣を取り出した。その剣を使えば目の前の少年を、この世から細胞一つ残さず消しさることができるとのことであった。

「させる、かアツ！」

しかし赤茶の少年、衛宮士郎は彼がその剣を使うより一瞬速く、ギルガメツシユの右腕を斬り捨てる。

「ぐっ」

血をまき散らし、弧を描きながらギルガメツシユ背後へと突き刺される剣。ギルガメツシユは舌打ちをすると、それを抜きに後ろへと下がる。士郎はチャンスとばかりに雄叫びをあげながら、ギルガメツシユの心臓に剣を突き刺そうと距離を詰めた。

今まさに士郎の剣がギルガメツシユの心臓を刺そうとしたその時。

どこからか現れた黒い光が、ブラックホールのようにギルガメツシユを吸い込んだ。

「何イイツ！」

抵抗をする暇も無く、ギルガメツシユは黒い光に吸い込まれると、辺りの景色はもとに戻り、神社の景観が士郎の目に飛び込んでくる。

士郎は静かに辺りを見回し、敵がいなかったことを確認すると、息を荒げその場に四つん這いに倒れてしまう。

だが、それも当然のことだろう。生身の人間でありながら、サーヴァントなどという過去の英霊と戦ったのだ。それも相手は英雄王と名高い「ギルガメッシュ」。本来なら瞬殺されてしまうほど戦力差があったのだが、ギルガメッシュが慢心していたことと、士郎の持つ投影魔術がギルガメッシュと相性がよかつたため、何とか勝利を掴むことができたのだ。

「はあ……はあ……ッ！」

士郎が息を整えていると、どこからか伸びてきた鎖が彼の右腕に絡みついた。

「チッ、出来損ないが……依代を失って我に押し寄せるとは……同じサーヴァントでは核にさえならぬと分からぬか！」

視線の先には黒い光に飲み込まれた筈のギルガメッシュが居た。黒い球体に飲み込まれそうになっているが、士郎の右腕に縛り付けた鎖をつたって這い上がろうとしている。

コイツだけは出してはいけない、そう士郎が直感するも彼にはどうすることもできない。

「ぐっ……」

汗が士郎の頬を伝い地面へと落ちる。

膠着状態が続く中、突如、士郎の頭の中に聞き慣れた声が聞こえ

てきた。

(右に避ける)

士郎はその言葉に従い右に避ける。すると、士郎の背後から一本の剣が矢のように飛来して、ギルガメツシュの眉間にて刺さる。ギルガメツシュはその衝撃で鎖を離してしまった。

「ギ」

視線を上へ上げギルガメツシュは自分の眉間に刺さった剣を見る。彼は、この剣に見覚えがあった。これは、自分が殺した筈の……。

「ぎさまーアーチャーッ！」

ギルガメツシュの叫び声は闇に吞まれ、ついに彼は姿を消した。

今この時、存在しない筈の第八のサーヴァント、英雄王ギルガメツシュが消滅したことにより冬木で起きた、魔術師が聖杯をかけて争う「第五次聖杯戦争」は幕を閉じた。

聖杯は破壊され、もう二度と聖杯戦争が行われることは無いだろう。

主人公である衛宮士郎は得難い経験を通して、一回りも二回りも成長して今後、苦悩することもあるだろうが「正義の味方」の道を後悔せずに突き進んでいくことだろう。

だが。

一つ疑問が残る。黒い光に飲み込まれたギルガメツシユは一体どこに行つたのか。彼は消滅したのだろうか。あの英雄王が本当に？
否。するはずがない。

彼は、次元を超え場所を超え、忘れられたかの地へとたどり着く。彼がサーヴァントとして呼び出された第四次聖杯戦争を物語を第一章とするのなら、受肉して参加した第五次聖杯戦争は第二章。そして、彼がたどり着いた先での冒険が物語の第三章となる。

彼の物語は、まだ始まつたばかりだ。

とある山にある神社。

そのこの巫女である、博麗霊夢は縁側でお茶を啜りながら暇を潰していた。

「ずっと……ハア」

極楽といった表情を浮かべ、彼女は空を見上げる。雲一つ無い青空が広がっていた。

「あー……どこかに金のなる木でも生えてないかしらねえ」

しみじみと、巫女としてあるまじき発言をする霊夢だったが、彼女がそうぼやいても仕方ないことだった。何せ、人里からこの博麗神社までは遠く、その道中には人間の天敵である妖怪が多く存在するのだ。故に博麗神社にくる参拝者は少なく、賽銭箱には一銭たりともお金が入っていない。食事をする分の蓄えはあるが、娯楽に

使うためのお金が無いのだ。

それならば、参拝者が来やすいように、妖怪を排除するだとか、護衛をするだとか何かしらアクションを起こせばよいのだろうが、彼女はめんどくさがりやでそんなことをしようとは考えていない。仮に考えたとしても実行には移さないだろう。

だから、ぼやく。

ぼやくだけならタダだから。

「ふう」

霊夢はゆっくりと息をつく。すると。

「なに？ ……紫？ 違うわね」

目の前の空間が歪み、中から闇が顔を覗かせた。こんなことができるのは彼女の知り合いの中で一人しかいないが、それは違つと断言した。

知り合いのつくるスキマには、趣味の悪い目玉がギョロギョロとしているのだ。しかし、この歪みには鳥肌がたつような目玉がなくただ暗い闇が見えるだけ。

では一体なんなのか。

一つ思いついたのが自分を倒そうとする妖怪の奇襲。博麗神社の巫女を倒して自分の格をあげようとするバカが時々いるのだ。そういう輩はパツパツと倒してさっさとお帰りいただいているが。

しかし、その考えも違つたろうと霊夢は思い直した。自分を倒そうとする妖怪なら姿を見せるはずだ。しかし、まだ姿をみせていな

い。

「本当、なんなのかしら？」

霊夢が首を傾げると、黒い球体は何かをドサツと吐き出して消滅した。

霊夢は警戒しながらソレに近づく。そして彼女は息をのんだ。

「お金が欲しいと言ったけど……金髪の間人間が欲しいなんて言っていないわよ」

黒い球体が吐き出したものは、眉間に剣が深々と刺さった右腕の無い血まみれの青年だった。

プロローグ（後書き）

作者が三人称を練習したいがために考えついた作品です。

書く上での注意事項や、表現のおかしな場所があればご指摘ください。

A c t i o n 1

私の腕の中には、一人の男が涙を流しながら目を閉じていた。何故、そんな顔をするのだ。我には分からなかった。それがたまらなく悔しかった。

だから、私は問うた。

「私の傍らに身を置いた愚かさを、今になって悔いるのか」と。

ギルガメッシュはゆっくりと目を開ける。初めに彼の目に映ったものは、木で出来たと思われる天井だった。それも新品なものではなく、何十年、何百年と年期が入っているような。

暫くぼーっとしていたが、時間の経過とともに頭が冴えてくる。

「ここは、どこだ？」

聖杯の泥を浴び、受肉してから十年間暮らしてきた協会の自分の部屋ではない。自分の部屋はこのような和風といった感じではなかったし、こんなに貧乏そうではなかった。

（我が住むには不相応の部屋だ）

豪華絢爛を好む彼にとってこの空間は耐えられるものではない。

「なんなのだ。この犬畜生がすむような小汚い部屋は」

不快感から顔をしかめた。

「起きてそうそう馬鹿にされるなんてね。感謝の言葉が先なんじゃないの、普通は」

突然襖が開き、一人の少女が入ってくる。その少女は巫女のような服を着ていた。ただ普通の巫女服では無く、脇を見せびらかしている。巫女の持つ神聖なイメージは無く、イメクラの客引きのようだ。

少女は腰に手を当てて呆れたと言わんばかりの表情でギルガメッシュを見た。

ギルガメッシュは眉をピクリと動かし、少女を睨みつける。

「誰だ、貴様」

「ハア……助けてやった上に三日もつきっきりで看病してあげたというのに、感謝の言葉も無いの？」

「助けてやった？ 看病？ 女、なんの話だ。そして、誰に向かって口をきいている」

天上天下唯我独尊といった八文字熟語の性格を地で行く性格の彼は少女のタメ口ともとれる、不遜な態度を許すことはできなかった。だからこそ、彼は口を開いた。誰に、口を聞いているのだと。

ギルガメッシュは殺気やら敵意やら悪意を全て含んだ王気を容赦なく少女にぶつけるが、それに中てられている少女は全然応えた様子は無く、飄々としていた。

自分の王気に何のアクションも示さない少女に疑問を覚えると同時に興味を抱いた。

「アンタねえ……自分の額に巻かれてる包帯とか、肘から先がない自分の右腕を見て何か思うところはないの？」
「なに？」

少女の指摘に、ギルガメツシュは自らの右腕を見た。しかし、肘から先は何故か存在しない。

一体、何故だ。

ギルガメツシュは記憶を辿り、直ぐに思い出す。あの赤き空間での闘いを。

ギリツと奥歯を噛み締めた。なんたる不敬か。王たる自分に傷をつけるとは。

「オノレ、贗作めエエ！」

「ちよつと、落ち着きなさいよ。傷口が開くわよ。病人はまだ寝てなさい」

憎しみの思考に染まったギルガメツシュを少女は物怖じせずに見る。そして彼の肩を掴むと強引に布団へと寝かせた。

「き、貴様。誰の許可を得て我に触れている！」

「知らないわよ。ったく口やかましい病人ね」

ギルガメツシュは抵抗を試みるが、体が思うように動かず、少女にされるがままに布団に寝かされた。

「貴様。私の体に何をした」

「あー、それは薬の副作用よ。ま、一日たてば直るわよ。多分」

「多分とは何だ！」

「仕方ないじゃない。私その薬呑んだことないし」

「貴様は我にそんな得体の知れぬ薬を飲ませたというのか！」

「大丈夫よ。腕利きのお医者さんの薬なんだから」

何が大丈夫だと喚く彼を見て、これ以上は付き合ってらんないと少女は付け足すと、立ち上がって部屋を出ようとするがギルガメツシュがそれを止めた。

「待て、女」

「……そんな固有名詞で呼ばれたのは初めてよ。で、何？」

「女。我は眠くない」

ギルガメツシュの唐突のカミングアウトに少女は戸惑った。彼が眠くないのに一体自分に何の用があるというのだ。

「はあ、それで？」

「貴様、我を楽しませろ。そうすれば、さっきまでの我に対する不遜な言動を不問に処すが」

彼の口から出たのはなんともまあ、自分勝手な言葉だった。少女は一瞬ポカーンとするも、すぐにため息をつく。

「はあ……何で私がそんな面倒な事を」

「何？ 王たる我の命令が聞けないというのか」

ギルガメツシュは不愉快気に眉をひそめた。本能的に、ほっといたらさらに面倒くさい事になると悟った少女は、彼に聞こえるように息を吐くと、懐から一枚のお札を取り出した。

「ほう。なかなかの魔力が籠もった札だ。それで何をするのだ」
「見てなさい」

霊符『夢想封印』

蔵かに少女がそう告げると、数多の様々な光を放つ光の球が飛び出し、綺麗な花火をあげた。ギルガメツシユは目を見開いて、それを茫然と見る。

「どう？ これで満足かしら？」

「……」

「……アンタ？」

先ほどまでやかましかった男の反応が無かったので、少女は彼の顔を覗きこんだ。すると、いきなりギルガメツシユは愉快そうに笑った。

「クククハハハハ！ よもや貴様は魔術師だったとは！」

「魔術師？ 私は巫女よ」

「よいよい。先程までの無礼を許そう。女、名をなんという？」

「……全然私の話を聞かないわね。まあいいわ。私は博麗霊夢。ここ博麗神社の巫女よ」

「博麗霊夢、か。よい。その名覚えたぞ。そうだ、先程の礼に我の名を教えよう。我の名はギルガメツシユ。ウルクの王、ギルガメツシユだ」

「ギルガメツシユ……ね。長いわね、ギルって呼ぶわ」

「よかるう。今、私の気分は良い。好きにするがいい」

「はいはい。じゃ、夕飯できたらまた来るから」

呆れた笑いを出して、霊夢はその部屋を出た。

A c t i o n 2

霊夢がいなくなり、一人部屋に残されたギルガメツシユはやることもなく、ただただ天井を見上げていた。

時間だけが無意味に流れていく。

「つまらん」

ギルガメツシユは退屈な時間が嫌いだった。意味無く過ぎ行く時間は嫌いだった。ワインの一つでもあればと部屋を見渡すも、畳と障子があるだけで何も無い。

先程までの高揚感はもう無い。ギルガメツシユイライラしながら起き上がった。霊夢は一日安静と言っていたが、彼の体は常人のそれとは違う。右腕が無いことで体のバランスがとれなく、少しよるめいてしまったがすぐに持ち直した。

「つまらん、つまらんぞ。霊夢。霊夢はいるか！」

今のところ、自分の暇を潰してくれそうな人物はあの巫女しかない。ゆえに選択肢は限られてくるのだ。

だが、いくら彼が彼女の名を叫んでも姿を表さなかった。

「チイツ。この我が呼んでいるというのに……」

ギルガメツシユは乱暴に襖を開けると、部屋の外に出る。ここの間取りが分からない彼だったが、とりあえず外を目指す為に適当に

歩く。

外には、それほど苦勞せずに出れた。しかし、靈夢の姿はない。

「どこにいったのだ」

キヨロキヨロと辺りを見回して、彼はふと疑問を感じた。

「ここは、どこだ？」

この建物は神社だと思われるが、彼があゝの贗作と戦った場所ではない。周りに見える景色も、ソレとは違った。そもそもギルガメツシユは考える。

(我はあの出来損ないの聖杯に不本意ながら取り込まれた筈だ。それなのに何故こうして意識を保ち、世界にいる)

本来なら消滅してしかるべきはずなのに……疑問や疑念は次々と出てくる。

(そういえば、靈夢の放った光の球。我は魔術だと思ったが、少し違う感じがした)

とはいえ、ギルガメツシユは魔術の学者ではない。そのため完全にアレが魔術ではないとはいうことができなかったが、人として生きていたときに戦った魔術師やサーヴァントとして戦ったキャストなどとはまた別の奇跡であるとは分かった。

色々と自問自答を繰り返し、ギルガメツシユは一つの答えを導き出す。

「ここは、異世界か？」

異世界。読んで字の如く異なる世界の事だ。彼がいた地球という世界と、ここは違う場所なのではないのか。

その結論は正しいが、厳密にいうとここは平行世界である。未来とは過去の分岐によって創られていく。その過去がちがえば最初は同じものでも、全然違ったものにへと成長していく。

だが、彼にとってここが異世界だろうがどこだろうが関係無かった。

何故なら。

「時空の果てであろうと、世界は余さず我の庭だ」

そう、彼は唯一無二の王なのだ。世界の頂点に君臨する。それがどこであろうと英雄王の翳す真実は変わらない。

例え、平行世界であっても。

故に。

「なれば、この世界を見て回るのも王である我の役目よ」

彼がこのような考えを抱いても仕方がない。ハーハッハッと高笑いしながら、彼は石段を下っていった。

ゆつくりと無駄に荘厳に階段を下るギルガメッシュ。外にでて気分転換になっているかというところ、実はそうではなかった。

「一体、いつになったら階段は終わるのだ」

理由は万里の頂上かとツッコミを入れたくなるほど長い石段。英霊と称えられた身であるため、つかれはしないものの、彼の精神は少しずつ疲弊していた。最初こそ楽しんでいたが、代わり映えのない風景に早くも飽き、彼のイライラはマックスであった。

「まったたく……ん？」

ギルガメッシュは不穏な気配を感じて、その場に屈む。すると、彼の頭上を鋭利な爪が音を立てて通り過ぎていった。

すぐさま、彼は振り返り自分に不敬な行動を起こした愚か者を見る。その姿を見て、彼は感嘆の息を漏らす。

「ほっ」

彼の目の前には体長二メートルくらいの大きな熊がいた。しかし、ただの熊ではない。三つ目の熊だった。

熊は鼻息を荒げ、ギルガメッシュをその鋭利な爪で殺そうと腕を振った。

常人ならば対応の出来ないくらい早い技だった。

だがギルガメッシュにとってそれは脅威になる速さではなかった。

つまらなそうに鼻をならすと、ヒョイとそれを避け、がら空きの腹に強烈なキックをお見舞いした。熊は思わぬ反撃に、吐血しながら、吹き飛ぶ。

「ハッ。有象無象如きが我に刃向かおうなど笑止千万。身の程を弁えよ」

ギルガメツシユは威風堂々とそう言い放つ。熊はヨロヨロと立ち上がると、血走った目で彼を睨みつけた。ザワザワと木々が葉を鳴らす。熊は殺気を全開に、先程とは比べものにならない速さでギルガメツシユに襲いかかる。

野生動物は、怒りを覚えると本来の力以上の能力を発揮する。この熊は野生動物では無く、妖怪なのだがそれでも根本的には変わらなかった。

ギルガメツシユは熊のその必死な様子を嘲笑う。熊の攻撃を避けると、いい余興を思いついたとばかりの意地の悪い笑みを浮かべた。

「よかるう。刃向かうことを許す。我も右腕の無い状態の戦い方を確立させたかったのだ。しかし、普通に闘ってもつまらぬな。ハンデをくれてやるう。我は貴様の攻撃が十になるまで、攻撃をしない。どうだ？ といつても貴様に私の言葉は通じぬか」

熊はギルガメツシユの言葉こそ理解できなかったが、彼の口調や動作から、ナメられていることを理解した。自分は、補食者だぞとばかりに雄叫びをあげた。

「その心意気はよし。さあ、来るがよい」

弾丸のような速さで熊はギルガメツシュに肉迫する。しかし、彼は余裕の笑みを崩さない。熊は丸太のように太い腕を振るった。

「一つ」

しかし、避けられる。ならばと今度は両腕を振り回した。

「二つ、三つ、四つ」

今度は頭突き。けれど、それすらもヒラリと避けられた。

「五つ、六つ、七つ、八つ」

死刑執行までの時間は刻一刻とせまる。熊はそのことを本能で理解していた。

「ほう、速度が上がったな。だが九つ」

奇をてらい、蹴りを繰り返すが、簡単に避けられる。そして遂にカウントが十になった。

ギルガメツシュはニヤリと笑うと、石段を登り熊の十段上へと立つ。熊は追撃をしかけるチャンスにも関わらず、その場から動かない。否、動けなかった。ギルガメツシュが隠していた王気を垂れ流しにしていたから。

熊は悟った。ああ、自分は何て奴に攻撃をしかけてしまったのだと。

「準備運動にすらならなかったが、まあそこそこ楽しめたぞ。これはそのお礼だ。受け取れ」

ギルガメツシュが左腕をあげると、背後から数多の武器が顔を除かせた。その数は、ざっと見ただけでも百を超えている。剣群の照準は全て熊に定められていて、後は王のかけ声一つで襲いかかるだろう。

「王の財宝」

ギルガメツシュは左腕を振り下ろした。

それだけで空間に固定されていた剣群は、対象にと襲いかかる。意志を持たぬ剣は熊の肉を斬り骨を断つ。何十もの剣が熊の体に突き刺さった。もう確実に死んでいるだろうが、まだまだ剣の雨は彼に降り注ぐ。

ようやくやんだ時には、熊の姿は見る影もなく、ミンチのような肉の塊がそこに出来上がっていた。

ギルガメツシュはそれを見て、つまらなそうに鼻を鳴らすと、くるりときびすをかえし、博麗神社への道を引き返した。

「腹が減った」

そう呟いたた刹那、ギルガメツシュは剣の一本を引き抜くと何も無い空間にへと統合した。

剣はそのまま木に突き刺さるだけだったが、ギルガメツシュの表情は固い。

「出てこい、雑種」

鋭い目つきで虚空を睨む。

「先程から我のことを付け回していた貴様のことだ。姿を現せ。こ

れは王の厳命である」

しかし、ギルガメツシュの問いかけに答えるものはいない。不愉快だと彼は舌打ちをすると、財宝の中から原初の地獄をその身に宿す剣を取り出す。あの赤色の嫌な空間に落としたままだと思っていたが、きちんと戻っていたようだった。

「もう一度だけ言う。さっさと私の前に姿を現せ。これは最後通牒だ」

再三の通告にも関わらず、相手は姿を見せない。

ギルガメツシュの額に青筋が浮かび上がる。

「起きろ、エア」

「あらあら、分かりましたわ。ですからその物騒な剣を閉まって下さいな」

空間が裂け、一人の女が出てくる。

「どうも初めまして。私、この幻想郷を管理する八雲紫ですわ。以後お見知り置きを」

A c t i o n 3

ギルガメツシュの前には胡散臭い笑みを浮かべた女が一人。意図の読み取れない笑みを浮かべてニコニコと彼を見ている。

八雲紫と名乗った女は、自己紹介以外は口に出さず、二人の間には奇妙な沈黙が訪れていた。ギルガメツシュは眉間に皺をよせて、八雲を睨みつける。だが、彼女は柳に風と彼の王気を受け流していた。

(こやつも霊夢と同じく我に物怖じ無いとは)

自分を恐れない者は彼にとって興味深い対象ではあるが、それと同じくらい腸が煮えくり返るくらいムカつくのだ。

霊夢はギルガメツシュの王気の中てられても平気だったのは、自身の持つ「空をとぶ程度の力」で無意識的に彼の王気を遮断していただけであるが、対するこの八雲紫は彼の王気を直に浴びているというのに平然とこの場に立っているのだった。大妖怪とうたわれる八雲紫である。彼女の今まで積み重ねてきたノウハウが、それを可能にしていた

ギルガメツシュが自分を恐れない八雲に対して、興味を覚える以上に殺意を覚えたのは一概にこの違いだった。もっとも本人は実際には気がついていなく、本能的にそう感じていただけであるが。

長い沈黙を先に破ったのは、ギルガメツシュだった。

「貴様、何者だ」

「あら？ 先程言いましたわ。私は八雲紫。ここ幻想郷の管理人です」

一つたりとも動かさない表情に、ギルガメッシュは得体の知れない何かを感じていた。

彼は生前、イーウルクの王として名を馳せていた頃――彼には求めていたものがあつた。それは、人間には無く神にしか無いもの。そう、「永遠の命」である。

それを求め東西南北様々な場所を冒険してきた。結局は永遠の命を手に入れることなく、人間としての死を受け入れた彼だったが、その道のりは生易しいものではなかつた。

ある時は同じ人間と戦い、ある時は森に巣くう化け物どもを葬ってきた。女神なんて見た目美女で中身はババアの存在とも渡り合ったこともある。

この女は彼が戦つたその女神に雰囲気似ていた。見た目と年齢があつていないような……。

関わらない方が身のためだと本能が提案するも、ギルガメッシュはそれをよしとはしなかつた。我が負ける要素など無い、と自分を鼓舞し八雲紫を見据える。

「それで、ゲンソウキョウたる管理人の貴様が我に何用だ」

「そんなピリピリならさらないで下さいな。せつかくの凜々しいお顔が台無しですよ」

紫はワザとギルガメッシュの神経を逆撫でするかのような口調で

話す。自尊心やプライドが人一倍高い彼は、やはりというべきかそれに対して激怒した。

「女ア……貴様、我を舐めているのか」

「クスクス。どうでしょうねえ」

ついにギルガメッシュの額からブチっといった音がした。彼の後ろから、二十もの剣が顔をのぞかせる。刀身は紫を捉え、いままさに飛び出そうとしていた。

「女。チャンスをくれてやろう。跪いて我に許しをこえ。さすれば命だけは助けてやろう」

「ごめんなさい。はい、これで満足かしら？」

「失せろ、雑種」

その一言で、剣は一斉に八雲紫を突き刺すべく乱射された。命の危機だというのに紫は表情を崩すことはなかった。それに違和感を感じるギルガメッシュ。何故、コイツは恐れない？

紫まであと僅かな距離という所で、何故か彼女の前の空間に歪みが生じる。ギルガメッシュは目を見開いた。

剣がすべてその空間に吸い込まれて行くではないか。

「なっ」

「お返しよ」

そして、歪みに吸い込まれた剣は目標を自分に変え、襲いかかってきた。自分の右腕を切り落とした贗作者のことを彷彿とさせる光景だった。これを喰らったらたまらないと、ギルガメツシユはその剣群を新しく展開した剣群で迎撃する。

「へえ。沢山持っているのね、アナタは」

「我は古今東西全ての宝具を所持している。これ位朝飯前だ。ところで、貴様今我の力を利用したな？」

どんなに鈍感な人物でも震え上がるような殺気をギルガメツシユは紫にぶつける。

「我は何であれ、利用されることがもつとも嫌いだ。全ての現象は王たる我に従わなければならない」

唯一にして絶対。英雄王の放つ言葉は、重みを持つ。

「……随分と傲慢な方ね。自分の思い通りにならないければ気が済まないなんて」

「当たり前であろう。我は唯一無二の王であるぞ」

「危険思考だわ」

二人の間を緊張が走った。第二次世界大戦後のアメリカとソ連の対立を見ているようだった。どちらかが何か行動を起こすだけで、とてつもない規模の戦いが起きる。両方ともそれは理解していた。

しばらく睨み合いが続くと、八雲紫がふつと威圧を解いた。

「止めとくわ。私が今日アナタに会いに来たのは戦うためではないし」

「ほう……では何のためだ？」

「アナタに挨拶する為よ。ところで、アナタのお名前を教えていただけないかしら」

芝居がかった動作で恭恭敬しく礼をする紫。その殊勝な心掛けにギルガメツシュの自尊心は満たされ、満足げにウムウムと頷いた。

「良い心がけだ、雑種。我が名はギルガメツシュ。古代ウルクの王である」

ニヤリと笑い、彼は紫を見下す。

「そう、ギルガメツシュね。ここ幻想郷は全てを受け入れます。勿論、アナタも。ようこそ、幻想郷へ」

「ゲンソウキョウ？ それがこの世界の名か？」

ギルガメツシュの問いに紫はコクリと頷いた。

「ここは、忘れ去られたモノが集まる幻想の地よ。人間は勿論、妖怪だって存在するわ」

「この世にかような面白そうな土地が残っているとはな。よいよい。それでこそ、我が土地だ」

ギルガメツシュが大胆不敵に言い放った「我が土地」というワ

ドに紫は初めて表情を崩す。それは僅かに眉を動かした、たったそれだけの動作であったが。

「我が土地、ねえ……本気で言っているのかしら」

「何をおかしなことを。この世は余すことなく私の土地である。八雲とやら、それを理解して管理人として我に挨拶に来たのであろう？ 大儀であった」

八雲紫はもう限界だった。今日彼女が彼の前に現れたのは、ギルガメッシュがここ幻想郷のパワーバランスを崩す存在と危惧して、警告にやってきたのだ。彼の戦闘能力は一個人が保有する戦力にしては強すぎるのだ。恐らく、本気を出した鬼の群れが襲いかかってきても、彼は傷一つなく勝利する事だろう。それは先程の妖怪と彼の戦いを見ても明らかなことだった。幻想郷は奇妙なパワーバランスの上に成り立っている。そのバランスを崩されてはたまったものではない。故に、管理者である八雲紫が今日彼に会いに来たのだ。「あまりデカイ顔をするな」と告げに。

実力での排除はできればしたく無かった。それは、例え勝利したとしても五体満足でいられるか分からなかったからである。だから、遙かな時を過ごすなか培ってきた弁論術で丸め込もうとしたのだが、よくいえばマイペース、悪くいえば傍若無人の彼に通用しなかった。

そもそも、彼は基本的に自分以外の存在は下だと思っているので、交渉など通じるはずがないのだが。

八雲紫は目の前の馬鹿を、前振りもなく消しとばしたい衝動にかけられた。だがそれはしてはならない。彼の能力に少しでも枷をつけなければ。押し寄せる激情をぐつとこらえて、言葉を紡ぐ。

「ふーん。まあ、いいけどね。でも、この世界に居る限りこのルールに従って貰うわよ?」

「ルールだと?」

ギルガメツシユは食いついた。

「そう。幻想郷では様々なルールがある。人里では人を襲わないとかね。その中でもアナタに特に守ってほしいのは、妖怪同士や紛争が起こった場合必要以上の力を出さないように設けられたとあるルールよ」

「ほう。どんなものだ?」

興味は引けたようだ。紫は話を続ける。

「その名はスペルカードルール。詳しくは霊夢にでも聞けばいいけど、主力の技を出すためのスキをつくる為に弾幕というものを用いるの」

このようにね、と紫が手をかざすと光の球がギルガメツシユに向かって放たれた。彼はそれを簡単に避けると、紫を睨んだ。

「何の真似だ、雑種」

「あら? 手元が狂ったわ」

そんな訳無いのだが、彼は紫の言い訳を信じて次は無いぞと低く言い放った。

「ギルガメツシュ。アナタはこの弾幕が出せる？」

「いや、魔術はあまり得意でないのな」

「そう。そこでアナタは弾幕の代わりに、先程の能力の使用を許可するわ。刃の潰した剣だけだけど……鋭すぎると、アナタの場合モノの数分で勝利してしまうから。その方がアナタにとっても楽しめるでしょう？」

ギルガメツシュは目をつむり考える。数分後、彼は目を見開くとよかるうと頷いた。

「王たる我が、下々の者の力量にあわせるのもまた一興か。分かった。雑種、ここ幻想郷のルールに乗っかってやるう」

紫は安堵した。これで断られたら何の為に出向いたのかが分からなくなってしまう。ギルガメツシュの見えないところで小さくガッツポーズをとると、紫はとっとと帰って今日のストレスを式である藍にぶつけようと密かに決意した。

「それじゃね、ギルガメツシュ。また会う日まで」

そう言って、自身の広げたスキマに彼女は身を投げ出した。

「……第二魔法か？ いや、違うか」

ギルガメツシュは目の前で起きた異様な光景に、ポツリと言葉を漏らす。ゲウと彼の腹の虫がなった。考えてみればもう三日も何も口にしていないのだ。

ギルガメツシュは食事をとるため博麗神社への道に戻っていった。

A c t i o n 4

ギルガメツシュが博麗神社へと戻ってくると、霊夢が境内の掃き掃除をしていた。

「霊夢。戻ったぞ」

ギルガメツシュが声をかけると、霊夢は顔を上げ此方に駆け寄ってくる。

「ギル。アンタ、どこに行ってたのよ………というか、体動いたの？」
「我を見くびらないで貰おうか。それと、我は我の庭を少し見て回っていた」

「庭？」

「そんなことよりもだ！」

一段と大きく声を張り上げると、ギルガメツシュは偉そうにふんぞり返った。霊夢はというと、余りの大声に耳をふさいでいる。

「もう、いきなりなんなのよ。大声を出さないでくれる？」

「霊夢。すべるかーどとやらを我に教えるがよい！」

「うわー、壊滅的に人の話を聞かないわね」

図々しさを乗り越した彼の態度は、一周回ってどこか清々しさを感じさせた。霊夢はヤレヤレとため息をつくとき、ギルガメツシュを見る。

偉そうな態度で、教えてもらおう立場の態度では無いが、彼の目はまるで幼子が新しいおもちゃを買ってもらった時のように輝いていた。霊夢は何故だか怒る気になれず、面倒臭いわと思いつつも丁寧に教えることにした。

まだ彼と知り合って数時間しか立っていないが、彼の性格を把握した所断つたら何をしでかすかわからなかったからだ。

そして、霊夢の懸念は当たっていた。

もし、彼女が万が一にも彼の願いを断っていたら博麗の巫女はこの世から消えていただろう。

「まあ、いいけどね。ところで、スペルカードルールを知らないなんて、アンタもしかして外人？」

「外人？ 何だソレは」

「ああ、それを知らないってことは確実に外人だね。外人ってのは、外の世界から何らかの方法でやってきた人間のことよ。そういうえば、アンタはこの世界の名前を知ってる？」

霊夢はギルガメッシュは、外人やスペルカードルールの名を知らなかったのだからどうせ知らないだろうと思っていたが、予想に反して彼は自信満々に答えた。

「それは知っている。ゲンソウキョウなる世界であろう？ この管理者を名乗る女がそう言っていた」

霊夢は驚いた。彼が幻想郷の名前を知っていたのについてもだが、あの八雲紫と接触していたという事についてもだ。

「紫と会ったの？」

「うむ。何故かは分からんが、我の事を監視していたのでな。その女からすべるカードルールとやらを聞いたのだ」

(……紫が外来人と接触するなんてね)

彼女が驚くのも無理はなかったといえる。彼女の知っている八雲紫は自分たち以外にはよほどのことが無い限り現れることは無いはずだ。それこそ、幻想郷に危機が迫るような事が無い限り。そんな彼女が、外来人であるギルガメツシュの前に現れたのだ。ということとは、彼女が彼を危険認定したということか。

訝しげな目で霊夢はギルガメツシュを見た。

「紫はなんて言っていたの？」

「お前にすべるカードを詳しく聞けとな。この世界にいる限り、この世界に従えと暗に言ってきた。この世界は我のものであり世界に我が従うというのは不快ではあるが、王として民草が興じている催しに参加するのも吝かではない。気に入らんかったら、我が新たな法を引けば良いしな」

なかなか危険なフレーズが彼の口から飛び出したが、霊夢は気にしないことにした。一応ルールには従うらしいし、紫が特段なにかをしないなら、自分が出る幕も無いだろう。あくまで、自分は異変を解決する巫女である。ギルガメツシュが問題を起こせば容赦なく戦うが、それまでは彼女は傍観を決め込むことにした。

「ふーん。それじゃあ説明するわよ？」

「いや、待て」

説明しろと言いながら、いざ説明を始めようとする霊夢をギルガメッシュは止めた。

「なによ？」

「その前に我は腹が減った。霊夢、飯を作るがいい」

「あ……アンタねえ……！」

霊夢の額に青筋が浮かぶ。明らかに怒っているが、ギルガメッシュは気にしなかった。

「どうした？ 早く我に飯をつくれ。腹が減ったぞ」

余りにも当然だとばかりに言うギルガメッシュに、彼女は怒る気が失せてしまった。

大きなため息をつき、彼女は空を見上げる。

「今月、ピンチなのにね……何でこんな疫病神がやってきたのかしら」

そう小さく呟く霊夢の目はどこか遠いところを見ていた。

「左腕だけで食すというのは、些か不便であったな……ふう。我に似合わぬ質素な飯だったが、なかなか美味であった。だが、明日か

らは豪華なものを用意するのだぞ?」

上品にハンカチで口を拭うギルガメッシュを見て、霊夢は今日何度目かの殺意を抱いていた。

食事中、やれみずほらしいだとか、やれ我に似合わぬ食事だとか、やれ魚が焦げているだとか、お前は意地の悪い姑か! と唸りそうになるほど霊夢に駄目だしをしてきたのだ。

霊夢はニコニコと笑って「ごめんなさいね」と言っているが、彼女の瞳のハイライトは消えていた。

「我としては、明日はこの世界の三大珍味とやらが食べてみたいな。それと、百年物のワインがあれば尚良い」

「……アンタ、元気ならさっさとこの神社を出ていきなさいよ」

思わず刺々しい口調になってしまったが、仕方がないものだろう。怪我人であったので、霊夢はギルガメッシュを保護して看病していたのであるが、当の本人はそれを感謝する素振りを見せない。さらに、厚かましいことに食事を所望し、作ってやったら作ってやったで文句を言う。どんなに懐が広い人物でも、助走をつけて殴りかかるレベルの凶々しさだ。

霊夢としては元気になったのなら、さっさとこの神社から立ち去ってほしかった。

「……何を言っている。我はこの世界で、我に似合う住居が見つかるまでここで暮らすぞ?」

「ハア!?!」

霊夢は思わず身を乗り出した。暫くの間だったとしても、この自己中男と暮らすなんて考えられなかった。白昼夢であって欲しいと願ながら、霊夢は彼に聞き返す。

「ここに、住むの？」

「ああ」

「本気の本気で？」

「くどいぞ。これは王の決定である」

ギルガメツシユの言葉を聞き、霊夢はガタツと食卓に突っ伏した。そんな霊夢の態度を見て、ギルガメツシユは不快気に顔をしかめた。

「貴様……王たる我が居座ることが、そんなに嫌か」

「違うわよ。お金が無いから、生活が苦しくなるなーって思っただけ」

「なんだ、そんなことか」

「そんなことって……結構重要なことよ！ 分かってるの？」

ギルガメツシユはフンと得意げに笑って見せた。

「その程度の問題なら我が解決しよう。なに、庶民から金をせびるのも可哀想よな」

「アンタねえ……昨日今日幻想郷に来たってのに、お金なんて持つ

てるはずが無いじゃない」

「ああ。だがな、我には特技がある」

「特技い？」

霊夢は顔をゆっくりと上げた。

「そつだ。我の特技はお金持ちだ」

背景にドーンと効果音がつきそうなほど、彼は自信満々にそう言い放った。対する霊夢は冷めた表情を浮かべ彼を見た。

「はいはい。冗談は良いわよ。何の得にもなりやしない」

「心外だな。王たる私の言葉を信じぬとは。金というものはあるべきところに集まってくる。なれば、我のもとにくるといふのが物の道理である」

何もギルガメッシュは根拠なく言っている訳ではなかった。

黄金率というスキルがある。これは身体の黄金比では無く、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命のことを刺すのだが、彼はこのスキルのランクがAであった。

大富豪でもやっていける金ぴかぶり、一生金に困らないというランクがAにでもなれば、道を歩けば壱千万が入っているアタッシュケースを拾い上げ、躓いた石が特大サイズのダイヤモンドだったりする。苦勞もせず金が手に入るといふ羨ましい能力だ。

そんな能力を持ったギルガメッシュは、自身の倉庫の中から一枚の紙切れを霊夢に手渡した。

「……今週の幻想郷口ト6？」

「先ほど石段で拾ったのだが、それをくれてやるっ」

なんとなくそのカードを眺めていた霊夢だったが、ふとあることに気がついた。

(あれ？ この数字どっかで……)

彼女は思い出した。そうだ、これは新聞に乗っていた数字と同じだと。

そこからの彼女の行動は早かった。スクツと素早く立ち上がると、棚に閉まってあった『文々。新聞』をとりだした。その中の記事の宝くじ配当コーナーを血走った目で、穴があくほど見ていると。

「……当たってる」

それも、一等に。何度も宝くじに書かれている番号と新聞を見返すが一文字一句違わずに同じ番号が書かれてあった。

「どうであった？ これが我の特技だ。さて、そろそろすべるかーど……」

ギルガメッシュはぶるぶると肩を震わしている霊夢の背中に声をかけた。

「ギルガメッシュ」

「……何だ？」

霊夢の放つ、他者を圧倒するような威圧に思わずギルガメッシュはたじろいだ。

（なんなのだ、この威圧感は……！　これを霊夢が出しているというのか！）

額に浮かぶ大きな汗の粒に、彼は気がつかなかった。霊夢は少しだけ顔を動かした。薄気味悪く彼女は笑った。不気味なほど小さな笑い声が、部屋のなかでこだまする。かの英雄王といえど、この空気に吞まれてしまった。

「ギル？　私、ちょっと行くところあるから行ってくるわ。留守番よろしくネ？」

ギルガメツシュは小さく頷く。その答えに満足したのか、霊夢は最後にクスリと笑ってこの部屋を後にした。

「何だったのだ。アレは」

A c t i o n 5

「……こんな俗物な巫女を我は初めて見たぞ」

ギルガメツシュは呆れた目で、金に頼ずりをしている巫女をみる。

「うるさいわね。金はあればあるだけ良いのよ」

霊夢は目をドルマークにして、ギルガメツシュのことは眼中になさそうだ。

つい最近までは、愉悦を求める外道神父の協会に住んでいた彼だけに偏見や特殊な思いこそないが、それでもこの巫女はあからさますぎた。

「言峰ですら、普段は普通の神父をしているというのに」

「なにか言った？」

「いや、独り言よ。それより霊夢。気が済んだのならさっさと我にすべるかーどとやらを教えよ」

「えー面倒臭いわね」

ギルガメツシュのこめかみがビクついた。今までで、自分が教えると言った事を拒否した奴がいようか。自分の愛称を呼ぶ許可を上げたからといって対等の立場になった訳ではない。そこるところをよくよく言い聞かせなければ、王である自分の権威が汚されてしまっただろう。

そう考えてギルガメツシュは、眼光を光らせて霊夢を睨みつけた。

「貴様……!!」

「あーはいはい冗談よ。因みに、イントネーションはスペルカードルールね。ただ、教えると言ったものの余り教えるのは得意じゃないのよね。だから、習うより慣れるということ、実践形式になるけど構わない?」

「ウム。よかるう」

「そ。じゃあ境内に出て待ってて。私は揃えるものを揃えてから行くわ」

そう言つて霊夢は立ち上がる。それにあわせてギルガメッシュも腰を上げた。

「そんじゃま、コレを渡しておくわね」

外に出たギルガメッシュは、霊夢から何も書かれていない札を三枚受け取った。彼はそれをマジマジと見た後、霊夢に尋ねる。

「何だコレは」

「それがスペルカードになるものよ」

「ほう!」

「じゃ、スペルカードルールの説明をパツパツとするわね。それが終わったら私と復習がてら模擬戦をやるわよ」

ギルガメッシュは目を爛々と輝かせて、霊夢の説明を待つ。
彼女は見つめられて、やりにくいなと感じながらも一回ゴホンとせき込んでから説明を始めた。

「基本的に、予め技の名前と命名しておいた名前を体現した技をいくつか考えておき、それぞれの技名を契約書形式で記した契約書を任意の枚数所持しておくことになるわ……これが、アナタに渡したスペルカードね」

「……？ 何も書かれていないのだが？」

「当たり前じゃない。後で自分の魔力やら思いやらを込めてその白い札に文字を書くんだから。そうすることで初めて、スペルカードが使えるようになるわ」

そうやって、霊夢は懐から自身のスペルカードを取り出すとギルガメッシュに見せた。ギルガメッシュは興味深く、ソレを穴が開くのではないかと思うほど隅々まで注意深く見る。

「……なかなか面倒なことをするな」

「仕方ないわよ。そういう風につくるんだから」

話を続けるわよ？ と霊夢は確認をとる。

「それで、このカードは決闘開始前に決闘内で双方で使用回数を提示するの。それで必ずカードを使う際には、『カード宣言』……つまり技の名前を叫ぶこと」

「なんと。不意打ちが出来ないということか」

「その通りよ。……かといって技名を叫んでくれた所で、普通だっ

たら避けられないだろ、ってツッコミたくなる鬼畜なスペルカードもあるんだけどね」

急に何処か遠い目をしだした霊夢をギルガメッシュはスルーした。いくら自己中な彼とはいえど、空気は読めるのだ。英雄王なりの優しさだった。

しばらく、彼女はブツブツと彼に聞こえないような小声で独り言を呟くと、ハッと我に返ったのか、顔を赤くしてギルガメッシュに謝る。

「ごめんなさい。少しトラウマを思い出してしまったわ」

「……早く話を進めよ」

「はいはい。えっと、何処まではなしたっけ……ああカード宣言までか。それじゃ、スペルカードルールは、基本的に弾幕で相手の行動を制限させながらスペルカードを叩き込む、って感じよ。それで、スペルカードルールの決闘の勝敗の決し方なんだけど、大きく分けて三つあるわ」

霊夢は人差し指を立てた。

「まず、一つ目。体力が尽きるもしくは、相手のスペルカードに当たって気絶すると負けだわ。まあ、常識的に考えてわかると思うけど。とはいえ、体力が尽きるってのは妖怪相手にはあまり無いかも。アイツらバカみたいに体力だけはあるし」

人差し指を立てながら、中指をたてる。

「二つ目。すべての技が相手に攻略された場合。つまり、スペルカ

ードを使い果たして相手が立っていたら負けね。たとえ余力が残っていたとしても、負けを認めなきゃいけないわ」

「自分と相手がラストのスペルカードを放って両方立っていたらどうなるのだ？」

「その場合は引き分けね。まあそうそう起こらないとは思っけど」

霊夢は三つ目と言いながら薬指を立てた。

「最後なんだけど、スペルカードルールって技の美しさにもウエイトが置かれてるのね。つまり、精神的な勝負って面があるわけ。だから、自分のスペルカードの美しさで相手を魅了すれば相手は自然に降参してくれるわ」

そこまで喋って、霊夢は疲れたのかふうと息を吐いた。余り人に教えるのは慣れていなかったのだろうが、それでも彼女がギルガメツシユに説明できたのは、このルールを作ったのが彼女だったからだ。

「スペルカードルールは殺し合いでは無いのか？ 先ほどから聞いていると、どうも生温い決闘方の気がするが」

ギルガメツシユがそう思うのも無理はなかった。つい最近まで、マスターと呼ばれる魔術師に呼び出され、他のマスターたちに呼び出された英霊たちと、血を血で洗うような殺し合いをしていたのだ。そんな彼が、ここ幻想郷の一般的な戦い方を聞いて、首を傾げるのは当然のことだろう。

彼の疑問に、霊夢はうーんと唸る。

「殺し合いってよりは、スポーツに近いかもね。もともと力が強いものと弱いものが同じ立場で戦えるように作られたルールだし。相手を負かしたら追撃して殺すことは禁止されてるけどね」

ギルガメツシユは目を見開いて驚く。よもやここまで生温いものだとは思っていなかったようだ。しかし、管理人と約束したためこの世界のルールに乗っかってやろうと彼は改めて決意した。

「知り合いは、スペルカードルールはこの世でもっとも無駄なゲームって言ってたわね。説明は以上よ。何か質問はある？」

「いや、必要無い」

「そ。じゃあスペルカードの作り方なんだけど……対して難しく無いわ。どういう技かを想像しながら技名を書くだけで良いのよ。はい、墨と筆ね」

ギルガメツシユは素直にそれを受け取ると、縁側に腰をかけた。

「初めは美しさとかは考えなくても良いわ。難しいでしょうし」

「いや、それには及ばん。我は王である。王たる義務として、他者を圧倒する美しさと強さを兼ね備えた技を考えねばならない」

それが、ギルガメツシユなりの美学だった。一見すると傲慢な彼だが、その実自分の美学に従っているだけなのだ。その美学は他者に理解されることは無いが。後にも先にも、彼の美学を理解できるのは立った一人だろう。

真剣な表情で筆をとる彼を見て、霊夢はこんな表情もできるんだ

と感心すると共に、この分だと夕方までかかりそうだなと苦笑いを零した。

Action 6

「……こんなものだろう」

ギルガメツシュが最後のスペルカードを作り終わった時には、もう日も暮れだし夕焼け空が浮かんでいた。一回大きく伸び、体を解すと彼は霊夢を呼んだ。

「霊夢、出来たぞ！」

「んー。予想通りね」

ギルガメツシュの後ろの障子が開き、中から霊夢がお茶を持って彼の隣に腰掛けた。はい、と霊夢はお茶を手渡す。ギルガメツシュはそれを一口飲んで、感嘆の息を漏らした。

「まこと美味であるな」

「玉露よ。ウチの神社で最高級のものだわ」

普通は人には出さないんだけど、特別にねと子供っぽく笑う。

ギルガメツシュは味わいながら、お茶を飲み始めた。

しばらくゆったりとした時間が流れた。

カラスの鳴き声と、穏やかな風の音が響く。草木が揺れ、花びらが舞った。その美しい光景にギルガメツシュは目を奪われ、なかなか乙なものだなと感傷に浸っていた。彼からしたらこうも穏やかな時間を過ごしたのは初めてかもしれない。

朋友の死後、死を恐れ何かに憑かれたように、東西南北様々な場所を踏破していった。心にゆとりを持たせる余裕なんて無かったし、持ちたくなかった。亡き朋友のことを思い出してしまっから。

死後、戯れに呼び出された聖杯戦争ではゆとりこそあったものの、その時間をこのように誰かと茶を飲み過ごすなんてことはしなかった。興味深い親父がいたし、何より伴侶に決めた女がいたから。それらを観察するのに忙しかったのだ。

小さなため息を吐くと、ギルガメッシュはコトリと湯のみを置いた。

「……それでは我とスペルカードルールの決闘をしようではないか」

「うーん、いいんだけどね……」

自分から言い出したことではあるが、霊夢は乗り気ではなかった。

「夕飯作らなきゃいけないし……」

時間は夕飯時。今から軽い模擬戦をしたらもうドッキリと日が暮れることだろう。

どうしたものか、と霊夢が考えたその時に上空から声がかかった。

「おい、霊夢！ 飯をたかりに来たぞ」

何事かと二人は顔を上げると、片方に取っては見慣れた、もう片方にとっては見慣れない、ウェーブのかかった金髪ロングの少女が

箒にまたがり浮いていた。

特徴的なのは、漫画にでてくるような黒色の先の尖った帽子。ギルガメツシユは（キヤスターか？）と少女を警戒する。

「おい、霊夢ー！ ……ん？ 隣にいる男は誰なんだぜ？」

「貴様、我より高い位置から話しかけるとは……身の程を弁えよ」

先ほどの穏やかな表情から一変して、ギルガメツシユは鋭い目つきで少女を睨む。

「うわ、これまた個性的な奴だ」

「控えよ、雑種」

彼は小さな小刀を少女に向けて射出した。銃弾よりも速く射出されたはずのその小刀は、少女にさっと避けられてしまったが彼女のエプロンのような服の裾を破った。

「うわっと。随分と好戦的な挨拶だな」

「ちよっ、ギル！ 止めなさい！ あの子は知り合いよ」

「知らんな。誰であろうと我に不敬を働く奴は罰せねばなるまい」

「そんな法がどこにあるのよ！」

「我が敷いた法だ」

腰に手を当てギルガメツシユは霊夢の言葉を無視して、少女を睨み付けていた。少女もそんな敵意バリバリのギルガメツシユを睨み

つける。

剣呑な雰囲気か辺りを覆った。風がはいつの間にか止み、あれほど鳴いていたカラスの声さえ聞こえない。

「もうっ！ 魔理沙！ アンタ降りてきなさい！」

「分かった」

霊夢の言葉に従い、魔理沙と呼ばれた少女は地面へとシュタツと降りる。視線はギルガメツシュに固定されたままだったが。

「で、霊夢。隣にいる頭のイカれた男は誰なんだぜ」

「良い度胸だな、雑種。我は今とてつもなく不快である。失せる」

「あーもう！」

にらみ合い続ける二人の間に霊夢は入った。

「魔理沙。この人はギルガメツシュって言って三日前に幻想郷に来た外来人よ。で、ギル。あの子は霧雨魔理沙っていう魔法使い。私の知り合いよ」

必死に仲を取り持とうと、霊夢は奮闘するも無駄に終わった。

（もう、どうしてこうなるのよー！）

思わず頭をかきむしりそうになる霊夢。ふとその時、彼女の頭に名案が浮かび上がった。

(スぺルカードルールの模擬戦、魔理沙に任せちゃおう)

少し闘えば彼らは満足するだろう、そう考えての事だった。色々
と面倒になったからでは断じてない。

「んー、ちょうど良いわ。魔理沙、ギルと弾幕ごっこをしてくれな
い？ 彼初めてだから色々教えながら」

「いいぜ。でも、コイツが怪我をしても私は一切の責任を持たない
ぜ？」

「ギルも、私じゃなくて魔理沙が相手が良い？」

「ふん。我に相応しい相手とは思わんが、少し遊んでやろう」

なんだと、とばかりに睨み合う二人。

やはりというべきか、二人は簡単に霊夢に乗せられた。チョロい
など内心でほくそ笑んで霊夢は「それじゃ、私は夕飯を作ってるか
ら」と言って神社の中へと戻っていく。

「雑種。今なら、泣き喚いて命ごいをすれば許してやらんこともな
いぞ」

「へん。弾幕ごっこ初めてらしいが、私は容赦しないぜ？ ビビっ
て逃げてても一向に構わないが」

「ハッ、吠えたな！」

「スぺルカードは全部で三つ。基本ルールだぜ。それでいいか？」

「構わん。行くぞ、雑種！」

英雄王ギルガメッシュと魔法使い霧雨魔理沙の戦いが幕を開けた。

魔理沙の放つ数十の光の球を、ギルガメッシュはそれを上回る数の剣群で押し返し、反撃する。魔理沙は向かってきた剣群を必要最低限の動作で避けながら、隙あれば光の球を放つ。

そんなサイクルで何十回と続いていた。

戦況はどちらかというと、弾幕ごっこに昔日の長があるはずの魔理沙が押されている。これには、当の魔理沙本人も驚いていた。

自分が予想していた倍以上強い。魔理沙は舌打ちをする。

「お前、弾幕ごっこは初めてじゃなかったのかよ！」

魔理沙は絶叫しつつ、向かってきている剣を叩き落とした。

「弾幕ごっこことやは初めてだぞ？ そら、まだまだ行くぞ」

「嘘をつけ！ だったらなんでこんな戦い慣れているんだよ！」

ギルガメッシュは魔理沙の叫びに、ただ口を少し歪めるのみ。その表情はまるで、特撮などで出てくる悪役のラスボスのようだった。

弾幕ごっこ初心者であるはずのギルガメッシュが、魔理沙を押しっていたのは理由があった。

彼の戦闘スタイルが、弾幕ごつこの理想的な形だったからだ。

彼がもし、剣を巧みに使い万の敵に挑んでいく「剣士」だったのなら、魔理沙はギルガメツシュを圧倒していただろう。近付かせなければいいのだから。

だが、彼は違った。無論剣の扱いは心得ているが、彼の戦闘スタイルは「圧倒的な物量に物をいわせる」ものであったからだ。

人類最古の英雄。『ギルガメシュ叙事詩』に出てくる古代ウルクの伝説的な王。

それが彼、ギルガメツシュだった。

彼は、全ての英雄の宝具の原典ともよべるものを蔵の中に持っていた。

例えば、クランの猛犬の持つ真紅の槍。

例えば、ブリテンの王が持つ聖剣。

彼の蔵の中には有名どころの宝具から、マイナーな宝具まで古今東西全ての原典を所持しているのだ。

そして、彼はその原典たちを蔵の中から射出するという半ば反則じみた戦闘スタイルをとっていた。

誰にも真似出来ない、彼だけが行える技。誰かが言っていた。『ギルガメツシュは戦争そのもの』であると。

故に、個人では絶対に勝てない。どれほど力を持った英傑だろうが、一騎当千の豪傑だろうが、万の敵に勝てるだろうか。

休むことなく降り続ける剣の雨あらね。

弾幕ごっこにたとえるのであれば、休む暇なく相手に襲いかかる無限の弾幕といったところか。

次第に魔理沙の息は上がって行く。

「休んでいる暇はないぞ！ 踊り狂え雑種！」

ギルガメッシュが攻撃の手を弱める事はない。剣が、槍が、斧が、鎌が、一斉に魔理沙へと牙をむく。

(……このままじゃジリ貧だぜ！)

仕方がない、と魔理沙は溜め息をつく。認めようじゃないか、アイツは強いと。

本当は、スペルカードを使うつもりはなかった。適当に弾幕をあてて気絶させて終了の予定だったが、四の五を言っている状況ではない。

「お前！ 見てろ、私のカードを見せてやるぜ！」

彼女はスツと自身のカードを取り出し、凜とした声で告げた。

魔符「スターダストレヴァリエ」。

A c t i o n 7

魔符「スターダストレヴァリエ」。

魔理沙はスペルカードを宣言すると共に、箒に跨り空へと舞い上がった。余りの速さに肉眼で追うことが出来なくなり、ギルガメツシユは魔理沙を見失ってしまう。だというのに、彼は辺りを警戒せず、腰に手をあて堂々とその場に立っていた。

「面白い。我に通じるか試してみよ」

ギルガメツシユは宝具の乱射を止め、不適な笑みを浮かべる。

雑種如きの攻撃が、自分に通じる筈がない。

余裕とも慢心ともとれる彼の態度は、魔理沙を格下と見下していることからくるものだった。

気がつけば、日が暮れて夜空に星空が浮かんでいる。

煌めく星星の中に、一際輝く流れ星があった。その流れ星は段々と大きさと輝きを増していき……。

いや、よく見れば、あれは流れ星などではない。

「行くぜツ！」

魔理沙だ。

彗星の如き速さで、ギルガメツシユに突っ込んでいく魔理沙。ギ

ルガメツシュが彼女に気がつき、剣群を放つ。

「ハッハー！ 無駄無駄だぜ！」

しかし、魔理沙は器用に避けつづけ、彼女に当たる事はなかった。ギルガメツシュが気がつけば魔理沙はすぐ前にへと迫っていた。

「チィッ、この程度でッ」

これでも最速のサーヴァントと呼ばれる、ランサーの槍を避けたことがある彼だ。魔理沙の突進を体勢をそらして避けた。

がら空きの背中が目に入る。ギルガメツシュはニヤリと笑った。

彼女のがら空きの背中に、蔵から取り出した剣を放とうとして。

「なッ！」

彼は地面を飛んでいた。比喻ではなく、そのままの意味で。何が起きたのだ、と思考するのと同時に背中に走る強烈な痛み。

彼は理解した。

自分は何かに吹き飛ばされたのだと。

何とか体勢を持ち直し、地面に着地して彼は見つけた。自分に襲いかかった、いや今も尚襲いかかろうとしている星屑を。

形や色は様々だが、それらの対象は確実にギルガメツシュだ。

彼は自分の真上をクルクルと旋回している魔理沙を見た。

「どうだぜ？ 私のスペルカードの味は」

魔理沙はその小さな口を三日月型に歪めていた。彼女の乗っている箒の尻からは、あの星屑が出ている。

ということとは。

「これは、貴様のスペルカードかつ！」

油断していた。ただ突っ込んでくるだけの技だと思っていた。

まさか、こんな。

ギルガメッシュは奥歯をギリツと噛み締める。無情にも数多の星屑が彼へと襲いかかった。その光景は、普段彼が追い詰める有象無象の最期と同じ。

「チェックメイト、だぜ」

強烈な破壊音と同時に砂埃が舞い上がった。

追い詰められたキングは、なすすべもなく盤台から退場する。

勝った、と魔理沙は思った。あれだけの数の星屑を喰らったのだ。逆に無事な方がおかしい。

「ふう、なかなかの強敵だったぜ」

額に浮かぶ汗を拭う。そして、今日の晩飯は何かなとか取り留め

のないことを考え出した。

この時点で彼女は、完璧にギルガメツシユのことを頭から追い出してしまっていた。

そんなくだらない事を考える前に砂煙が舞う場所にありつただけの光弾が、スペルカードを撃ち込むべきだったのだ。

しかし、彼女は自分の勝利を確信してそうしなかった。最低でも、警戒はしておくべきだったのに関わらず。

魔理沙の誤算は二つ。

一つはギルガメツシユを人間という狭い枠に当てはめていたこと。そして、もう一つは。

「ふむ。余興は終わりか」

彼が対魔力用の金色の鎧を持っていることに知らなかったことだ。

「些か肝を冷やしたぞ。我にコレが無ければ大怪我を負っていた」

砂煙が晴れ、ギルガメツシユが姿を現す。先ほどまでの私服姿ではなく、太陽のように光り輝く黄金の鎧を身につけて。

「お前、なんで、無傷なんだ!」

「ふむ。我のこの鎧は特別製でな。一定以上の魔術でないと通用せぬ」

苦虫を噛み締めたような顔をする魔理沙。この場においては不味い

と直感して、箒に跨り空を飛ばうとした。

だが。

「そう急ぐな」

王符「天の鎖」

四方八方から出てきた頑丈そうな鎖が、魔理沙を拘束して、吊り上げた。

必死に拘束から逃れようと体を動かすが、所詮は少女の力。どうこうできる代物ではない。

ギルガメッシュは背筋が凍るような笑みを浮かべながら魔理沙に近づく。

そして、彼女の顎をグイッと持ち上げた。

「良い面構えだ。いや、雑種にしてはなかなか見応えがある」

「いたいけな少女を拘束して、そういう趣味か？」

「クク、安心しろ。我が手を出すと決めた女は貴様のような有象無象ではない。我に拘束された時のその反抗的な態度は似ているが、アイツはもっと気高い」

「ハッ、どうせこっぴどく振られたんだろ、金ピカ」

ギルガメッシュはピクリとコメカミを動かした。魔理沙は凶星か

よと小さくほくそ笑む。

「……立場が分かっていないようだな」

ギルガメツシュは百にも及ぶ剣群を現界させ、魔理沙に見せつける。

思わず震え上がるようなその光景に、魔理沙は気丈にも笑ってみせた。

「楽に死ねると思うなよ？」

ギルガメツシュが指をパチンと鳴らす。

風を切りながら魔理沙を串刺しにせんとばかりに襲いかかる剣のシャワー。

剣が魔理沙の服を切り裂き、槍が肩を貫き、鎌が肌を傷つけ、斧が鈍い痛みをもたらす。

ギルガメツシュは、魔理沙が傷ついていく様を無表情で見つめていた。

何百、何千もの剣群が魔理沙を傷つけ後ろに墓標のように突き刺さった。それを見て、ギルガメツシュは唐突に乱射を止めた。

「雑種。何故、貴様は」

それと同時に、魔理沙を拘束していた鎖が消える。膝から崩れ落ちる魔理沙。

「笑っていられるのだ」

「決まっているぜ」

彼女はヨロヨロと立ち上がると、ニイと笑ってみせた。

「私が、ここから逆転サヨナラホームランをかつ飛ばすからだぜ」

ペツと血を吐き出すと、魔理沙は真っ直ぐと彼を見据えた。

それは、絶望的な状況だろうと己の勝利を疑わない戦士の目だった。どことなく、自分が伴侶と認めた騎士王と魔理沙の姿が被った。それを見て初めてギルガメッシュは魔理沙を認めた。

この相手は我にとって不足はない相手だと。

ギルガメッシュは愉快げに笑う。まだ気骨のある雑種がこの世に残っていたか、と。馬鹿にしているわけではなく、ただただ愉快げに彼は笑う。

「良いだろう。雑種、名は何というのだ」

「霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ」

そう言っただけ彼女は痛むであろう体を無視して、ミニ八卦炉を取り出した。彼女の特別なマジックアイテムである。

「もう、あまり長く私は戦えない。だからこれで決着をつけてやるぜ」

そう言っただけ同時に、彼女はミニ八卦炉に魔力を込めだした。ミニ八卦炉は暖かな、されど狂暴な光を点滅させる。

「我に刃向かうことを許そう。全力の一撃を出すが良い」

ギルガメッシュは邪魔をせずに、魔理沙のことをじっと見ていた。

「金ピカ。一つ教えておくぜ？」

「なんだ？」

「弾幕はパワーだぜ！」

そして、魔理沙はスペルカードを宣言した。

恋符「マスタースパーク」

自身の代名詞ともいえるその技。とてつもなく太く、荒れ狂う光の奔流はギルガメッシュを飲み込まんとしていた。

「ほう、コレは」

ギルガメッシュは、自身を喰らおうとしている光を見ても逃げよ
うともせず、笑いながらソレを見ていた。

「アイツのアレとあまり変わらんか」

思い出すのは気高き竜。ブリテンの王の必殺技。

彼女の約束された勝利の剣と魔理沙のマスタースパーク。端から
見ても、あまり変わらない威力であろう。

だが。

王たる自分の障害にすらなりはしない。

「ククク、愉快よな。遠く離れた地で、再びアヤツの技が見れるとは」

ひとしきり笑うと、ギルガメッシュも二枚目のスペルカードを宣言した。

「出番だ、エア。アイツを屈服させよ」

王符「乖離剣エア」

すると、そのスペルカードは黒を基調として赤い筋が入った剣へと変化する。

彼はそれを構えると。

「天地乖離す開闢の星」

その真なる力を解放させた。

圧縮された赤黒い風圧の断層は魔理沙の白い光へと激突する。

刹那、大地が啼いた。

競り合いは一瞬。白は赤を呑み込もうと、赤は白を塗りつぶさんと。

木の枝が激しく揺れる。神社の鳥居が崩れ落ちた。

競り勝ったのは。
ギルガメツシュの方だった。

瞬く間に侵食していく赤は、最終的には魔理沙を呑み込んだ。

魔理沙の体はボロボロだった。当然だ。人のみでありながら、元始に生み出された神造兵器の技を喰らってしまったのだから。とめどなく血は流れ、ピクリとも動かない。

彼は詰まらなそうに鼻で笑うと、魔理沙に近づき見下す。

「セイバーに似た技だと思いきや、やはり所詮は紛い物か」
ガシツと魔理沙の頭を踏みつける。

「失望したぞ、霧雨魔理沙」

「そうかい。じゃあ、お前の目は節穴かってな」

「……！」

女子らしからず、魔理沙は鼻から血をだしているがまるでイタズラが成功した子供のように笑った。

そして、最後のスペルカードを発動する。

「私からお前に教える二つ目だ。……油断は命とりだぜ？」
ギルガメツシュはいち早くその場から離脱しようとするが最早遅い。

魔砲「ファイナルマスタースパーク」

先ほどより強烈な光が彼を呑み込んだ。

霊夢は境内に出て言葉を失う。

破壊され尽くした景観、鳥居、賽銭箱。血まみれで横たわる二人。肩をふるわせた。

「……ど」

そして、彼女は腹の底から叫んだ。

「どうして模擬戦でこんな状況になるのよーッッッ!!」

因みに余談ではあるが、せっかく宝くじで手に入ったお金は修理費に全額消え去ったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4102s/>

東方英雄王

2011年4月29日02時58分発行